

平田 小六（ひらた・ころく）

1、プロフィール

昭和9年ごろは、島木健作を一步リードするプロレタリア文学の新星として注目されたが、戦時で小説が書きづらくなり、中国に渡った。戦後は帰国し、評論活動に転じた。

<生没>

1903(明治 36)年 11 月 1 日 ~ 1976(昭和 51)年 5 月 18 日

<代表作>

長編小説『囚はれた大地』

短編集『童児』『瑞穂村』『平田小六短篇集』

評論集『菊よみがえる朝』

<青森との関わり>

旧制弘前中学校卒業後北津軽郡下の小学校の教員をしたが、その時の体験をもとに後年農民の悲惨な生活を描いた。

2、作家解説

小六は、明治 42 年 11 月 1 日、父孝次郎、母くめの三男として、秋田県大館町に生まれた。父は東奥義塾から青山学院へ進み、卒業後は旧制大館中学校の英語教師をしていた。母は「他山塾」で有名な工藤他山の二女。2年後、弟勝男が生まれた。

高等小学校を卒業してから弘前中学を受験した小六は、まっすぐ進んだ勝男と一緒に合格、入学する。入学後小六は画家を目指すようになり、雑誌「白樺」を読み、教会に通い、学問そっちのけで文学や芸術に没頭。ところが、父が脳卒中で倒れ、弟が進学することになったので、自らは進学を断念、教師になることを決意する。

大正12年3月、三和尋常小学校、13年3月からは小泊村下前尋常小学校、15年1月から6月まで相内尋常高等小学校に在職。この間、北津軽郡下の寒村の歴史的凶作と地主の過酷な搾取にあえぐ貧しい農民の生活を目撃し、強い共感を覚える。

昭和3年6月、父が死に、東大医学部在学中の弟が病死するや、宿願を果たすべく上京、東京毎日新聞社の記者となる。しかし、記者生活に嫌気がさして退社。7年には「唯物論研究会」の編集員となる。この時から心内に渦巻いていた混沌に秩序と方向が与えられるようになり、過去の見聞を元に「囚はれた大地」を構想、発表する。

昭和8年11月からこれが「文化集団」に連載されるや、平田はプロレタリア文学の新星として注目され、その勢は島木健作をも凌いだ。しかし時代は、言論と思想が弾圧され、第二次世界大戦に傾斜していく、暗い谷間であった。平田はデビュー空しく、わずか4年で行き詰まってしまう。13年8月、中国に渡る。戦後は引き揚げて広島・東京に住む。評論活動に転じて、県人、明治の志士達の精神研究に没頭。人からは平田は右傾したと囁かれたが、平田の目は常に虐げられた人々に対するヒューマンな同情と権力的なものへの批判に向けられていた。

昭和51年5月18日、73歳でひっそりこの世を去った。翌年小泊村に文学碑が建った。

3、資料紹介

○『囚はれた大地』

図書

1934(昭和9)年9月1日

195mm×130mm

昭和5年頃の北津軽の、度重なる凶作にうちひしがれ地主に搾取される無知で貧しい農民の、悲惨な生活を描いたもの。不遇の中に、愛し、喜び、悲しみながら生きる人々に、教員木村は限りない愛情と共感を寄せていくが、警察権力によって捕えられてしまう。

○短編集『瑞穂村』

図書

1939(昭和 14)年4月 20 日

190mm×130mm

「楽園通信」では、原野を開墾して作った大農場へ、定住農民募集の宣伝文句に釣られて夜逃げして行く、5家族 28 人の期待と不安、絶望が描かれる。楽園と思われた福須馬農場は、村にもまして荒れ果て、資本家と権力に縛られた地獄であった。

○『平田小六短篇集』

図書

1972(昭和 47)年 11 月 30 日

215mm×155mm

戦前に書かれた「仙吉の生いたち」「雨がえし」「凶作地帯」「童児」「秋晴れ」「双曲線」に、戦後の「山姥」「陽炎」「杜の町のあけくれ」「片隅で」「常森を尋ねて」を収める。巻頭に著者の写真と序文、巻末に編者の「平田先生に寄せて」がある。